
黄金の堅武斗虫 ～ミクロムーン島に眠る秘宝～

るーずりーふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の堅武斗虫 ～ミクロムーン島に眠る秘宝～

【Nコード】

N0881N

【作者名】

るーずりーふ

【あらすじ】

五人の子供達がつくった「チーム」での友情とバトルの話。
楽しく遊んだ「あの日」を思い出すような、そんなお話。

・・・かな？

黄金の堅武斗虫

小さき月の形した
島に集まる堅き武者
金に輝くその姿
月にも負けぬ美しさ

「せんごく！ブラックレモンカスタード諸君！
われわれゴールデンビートルズが宣戦布告に参上した！
ポルデリートで決着をつけようではないか！
ただし、強制はしない！
のるか、ひくか、10秒後に叫べ！
じゅーう、きゅーう、はーち……
……さん、にーい、いーち、
返答！」

「参りました……」

こうして、俺たちの張り場はどんどん大きくなっていった。

ある大雨の日のこと。

俺たちは本部である「駄菓子屋こなつつ」でいつものようにやっていた。

「さて、今日は雨が降っててなんか気分が乗らないから張り場の拡張はいったん休止にする。
いいか？」

「うえーい。」

ガムをクチャクチャさせながらやる気がなさそうに言うリーダーに

どっちだかわからないこれまたやる気のない返事をする俺たち。ここ一週間はずっとこんな感じだ。

張り場を広げるわけでもなく、作戦を練るわけでもなく。

駄菓子屋を右手にマンガを左手に、ただダラダラと時間をつぶしていた。

まあそうなってしまうのかもしれないといえばしょうがないのだ。

1年前、偶然同じクラスになり、偶然席が近くなった5人で冗談半分のチームをつくった。

名前は「ゴールデンビートルズ」。

これも、誰だったか忘れたがメンバーの一人の

「なんか、カブトムシってかっこよくね？」

という一言でテキトーに決めたものだ。

つまり、当時では珍しいどこまでもゆる〜いチームだったのだ。

俺たちは「駄菓子屋ここなっつ」を拠点に少し小さめの張り場を決めて

毎日そこに集まった。

周りのチームが張り場争いに大奮闘していても、俺たちは関わらなかった。

張り場の広さなんか気にしなかったからだ。

しかし、張り場争いはどんどん勢いを増していき、

「ゴールデンビートルズ」もこれに参加せざるをえなくなった。

争いに負ければ張り場を吸収されてしまうからだ。

そして、バトルを繰り返していくうちに俺たちは気づいた。

『この張り場争いってやつで、負けたことないじゃん！』

そう、「ゴールデンビートルズ」は自分たちの想像以上に強かったのだ。

それからすっかり調子に乗った俺たちは周りのチームに次々とバトルをしかけた。

俺たちはいつの間にかこのバトルにハマっていたのだ。

連戦連勝の優越感に酔っていたのかもしれない。

気づいたら、敵は一人もいなくなっていた。

途方もなく広い張り場と虚脱感だけが残った。

結局、俺たちは吸収した場所に足を踏み入れることもなく

最初と全く変わらない広さのまま、張り場での放課後を消費した。

きつと、張り場争いは俺たちの生き甲斐？みたいなモンになっていたんだ。

生き甲斐をなくした「ゴールデンビートルズ」はもうダラダラすることしかできないのかもしれない。

「アンタらさー、子供なんだからもうちょっと元気になりなさいな。前はあんなにさわいでたのに、最近はめっきりおとなしくなって・

・

そんなにダラダラしてたら、そのうちダラダラ星人になっちゃうよ。それでもいいのかい？」

店の奥からおばちゃんが声をかけてきた。

「ダラダラ星人って・・・・」

誰かがつぶやくとおばちゃんがこつちにやってきた。

「アンタら、ダラダラ星人ナメちゃいけないよ。」

ダラダラ星人になるとね、毎日毎日やる気がでなくて

寝ところがつたまんま腐っていくんだから。」

あーやだやだ、と首を振っているこのおばあちゃんは

「駄菓子屋ここなつ」の店主だ。

すなわち駄菓子屋のおばちゃんである。

おばちゃんは「ゴールデンビートルズ」結成時から

ずっと俺たちのことを見守ってくれている一番の理解者だ。

きつと元氣のない俺たちを心配しているのだろう。

「そんなこと言っただっておばちゃん、なにしたらいいのかわかんないんだよ。」

明日が見えないんだよ。」

リーダーが絶望的な声で言った。

「うわあ、生意気いつてるよ！これだから最近の子は。」

おばちゃんは、しょうがないねえ、と首を振りながら奥へひっこんでしまった。

なにやらがさごと音がする。

店の奥の方、さっきおばちゃんが引つ込んだときからだ。

「おいヤス、なにやってんだろ、おばちゃん。」

隣の西村智樹　「ニシが小声で囁いてきた。

「さあ、そろそろボケてきたか？」

適当に返すと、反対側の柚木聡留　「ユズが食いついた。

「え？そうなの？やばいじゃん。」

「いや、まだわかんないけど。」

「なになに、何の話？」

鶴見渚　「ツルも加わり、ひそひそも大きくなってくる。

ざわざわが広がる。

ここまできて、リーダーが何も言わないはずがない。

竹本勇大　「タケが口を開いた。

「おまえら、うるせーんだよ！今いいとこなん……………」

が、それはバーンという音に遮られた。

「アンタら、これを見な！」

正面の壁に押しつけられた紙が目飛び込んでくる。

「なんだよおばちゃん、びつくりさせんなよ。」

リーダー以外全員の口が閉じた。

「いいかい、これはね、古くからこの島に伝わる歌なんだよ。

もうこれを歌える人はいないんだけどね、

伝説になつて残ってるっていう、ありがた〜い歌なんだよ。

もしかしたらほんとにいるのかもしれないよ。」

おばちゃんはまだ何か言っているリーダーに紙を渡した。

みんなの頭が集まる。

それにはこんなことが書かれていた。

小さき月の形した

島に集まる堅き武者

金に輝くその姿

月にも負けぬ美しさ

「小さき月の形した島っていうのが

ここ、ミクロムーン島だっていうのはわかるね？

堅き武者っていうのはカブトムシのことなんだよ。

それが金に輝くっていうことは？」

「ゴールデンビートル・・・・・・・・・・」

ニシがつぶやいた。

「そう。ここには黄金の堅武斗虫がいるんだよ。

甲虫じゃないよ、堅武斗虫だからね。」

耳で聞くだけじゃどうちがうのかわからないが、

この際そんなことどうでもいいか。

「おい、おばちゃん、耳で聞くだけじゃどうちがうのかわかんないんだけど。」

ユズ・・・・・・・・・・

おばちゃんが無視して続ける。

「ほらアンタらのチームとやらの名前ともおんなじだし、

ここでダラダラ星人になるよりはましでしょ。

さがしてくれば？」

男の子ってカブトムシ好きだよねえ、それが金ピカなんだよ。

ほら、探しに行つてこよう！」

なんか急に若返つたようなおばちゃんに押されて、

俺たちはまあいいかなーと思つていた。

ただ、タケだけはちがった。

「だーれがそんなのにのせられるとおもつてんだ。

黄金のカブトムシなんてホントはいないんだろ？

その紙だって、さっき書いてきたにきまつてる。

もともとないモン探すなんてそんなことはしないんだよ。」

ああー、これだから鈍感君は困るんだ。

それだっていいじゃないか。

黄金のカブトムシなんていないかもしれない。

でもおばちゃんは毎日ダラダラしてる俺たちを心配して

わざわざこんなことしてるんだから。

そのくらい察しろよなまつたく。

俺は心の中で溜息を一つしてからリーダーに言った。

「俺、聞いたことあるんだけど、黄金のカブトムシ。この前いここが見たつて。」

こんなのうそにきまつてる。

でも、司令塔と呼ばれる俺の言葉をみんなが信じないわけがない。

「おいヤス、それホントか？まあそうだよな、ヤスが言うんだもん
な………」

考え込むリーダー。

よし、かかった。あともうちよいだ。

「まあいいんじゃないの。もし見つかんなくても一夏の思い出つてやつになるし。」

こういうかつこいい言葉にタケは弱い。これで決まることはまちがいない。

しばらくして、タケが言った。

「よし、じゃあ行ってみるか。みんなで一夏の思い出をつくらうぜ
！」

「おーっ！」

ふっ、チョロいな。

俺は心の中で不敵に笑った。

男子とはカブトムシを追い求める生き物である。

これは古来からの習性だ。

このチームに例外はいなかった。
俺、ヤスこと安川涼もふくめて全員。

こうして俺たちの戦いの火ぶたは切って落とされた。
ただ、これはまだほんの始まりの始まりであつた。

宣戦布告

いつの間にか雨は止んでいて、道路の水たまりに虹がかかっている。

「おばちゃん、ありがとねー。」

リーダーのタケが紙をひらひらさせながら「駄菓子屋こくなっつ」を出た。

「お前ら、行くぞ！」

おおー、やる気満々だねー。

ただ、状況を理解していない者が一人。

「いくつて、どこにさ。」

ユズが訊ねた。

どこまで話をきいてないんだろう。

でもそこはリーダー、かけ声を一つ。

「黄金のカブトムシー！！」

「ゴールデンビートルー！！」

それは突然やって来た。

こんなこと誰が予想した？

俺たちがいざカブトムシを捕りに行かん、と

勇んで歩き出した時のことだ。

「キ、キ……」

背後で急ブレーキの音。

何があったのかと一斉に振り向く。

俺たちが目にしたのは、

自転車にまたがった三人の少年たちだった。

「これはこれは、もしかして君たちがゴールデンビートルズか？」

右側の少年がいきなり芝居っぽい口調で話し出した。

なんだ、なんだ？誰だこいつらは。

俺たちの間に緊張が走る。

続いて左側。

「噂に聞くところ、このあたりの張り場をすべて吸収したとか。」

また芝居口調だ。

イライラするからやめてほしいんですけど。

そして、真ん中。

「少し話がしたい。」

タケが一步進み出る。

「竹本勇大、ここのリーダーだ。

話の前に訊いておく、お前たちはなんだ。」

おおっ、きまつてるねー。

右側が肩をすくめ、首を振る。

「おやおや、われわれを知らないとは。ここは情報の伝達が遅いよ
うで。」

なんか本気でイラつときた。

俺の両隣で歯ぎしりの音。

次に左側。

「それとも、外のことになど関心もないということか。」

そこまで聞いたとき、俺はイライラしているだけではないことに
気づいた。

そうだ、俺はこのチーム唯一の頭脳派。

やつらを分析する役目がある。

今までの状況と言葉から、真ん中の少年がリーダー格であることは
まず間違いない。

そしてこの態度。

よほど自分たちに自信があるのか、それともただ威勢を張っている
だけなのか。

まだわからないか。

あとは先ほどのセリフだ。

話の流れから察するに、「外」というのが俺たちの張り場の外であることは明らかだ。

ただ、自転車に乗っていたところからすると、島の外から来たわけではないようだ。

ミクロムーン島で俺たちの張り場になっていない場所。

やつらはそこからやって来た。

真ん中の番だ。

「知らないのなら仕方がない。こちらだけ情報を持っているのは不公平だからな。」

とうとう名乗るか。さあこい！

「いばらすき！」

「きさらぎかなた！」

「じんぐうじいぶき！」

「「われら青空決死隊！！」」

今までの順番を忠実に守り3人は名乗った。

それぞれの名前のあと最後にバシッとポーズを決めるこの名乗り方・

・・・

チームか！

ということとは、俺たちのまだ知らない市外チームだろう。

それにしても、この息のあった完璧なパフォーマンス。

すすき、かなた、いぶき、それぞれの頭文字をとった「スカイ」からの

「青空決死隊」というチーム名。

俺たちがテキストに決めた名前とはくらべものにならない。

『並のチームじゃない。』

みんなもそう感じたらしい。

俺たちの間に緊迫した空気が流れる。

タケが目配せをした。

そうだ、こっちも名乗らないと。

俺は息を吸い込んだ。

「やすかわりよう！」

「にしむらもとき！」

「ゆずきさとる！」

「つるみなぎさ！」

「たけもとゆうだい！」

「……われらゴールデンビートルズ！」……」

よし、ポーズもキマっていい感じだ。

どうだ、とばかりに相手の方を見やる俺たち。

しかし、青空決死隊はそんなこと気にもしていないようで、

あのム力つく芝居口調で平然と話し出した。

「話というのはもちろんバトルのことだ。」

「それぞれの張り場をかけた神聖な戦いをしようではないか。」

「戦利品には事欠かない。」

こちらも君たちと同じくらいの広さを誇る張り場を持っている。」

なに！？今なんて言った！？

まさかあいつらも張り場争いを勝ち抜いたとも言うのか！

「お互い大きい勝負ゆえ、恨みつこ無しの三回戦とする。」

「内容は全てそちらに任せるとしよう。」

「さあどうする。のるか、ひくか！」

張りのある声が余韻を残して消えた頃、俺たちは叫んだ。

そんなの、きまつてる。

「……その勝負、受けた！！」「……」

「まっさか、市外にあんなチームがいたなんてなー、思わないよな
ー。」

ツルがオレンジ味のアイスをなめながらつぶやく。

あの宣戦布告から二日が過ぎ、今日は「駄菓子屋こなつつ」で作戦会議だ。

昨日、情報収集担当のツルがあちこち駆け回ってくれたおかげでなかなか興味深い情報をたくさん手に入れることができた。

それによると、あの「青空決死隊」は隣の市で大暴れしている最強のチームだということらしい。

俺たちと同じように、張り場争いに勝ち続け、とうとう一週間前、市内の張り場を全て吸収し、それでも飽きたらず隣の市にも手を出した、と。

なんでも、そのリーダーであるじんぐうじいぶきはこの島でも一番の起業家、神宮司グループの御曹司らしい。

中でも一番驚いたのは、あの時いつも一番最初にしゃべってたやつがなんと女だったということだ。

たしか、いばらすすきとかいうやつだ。

男だとちよつと高めで女だと低めな声と、

男だとちよつと長めで女だと短めっていう中途半端な髪型のせいなのだが、

そんなことも見抜けなかったとは、俺の目も悪くなってきたか。そして残る一人、きさらぎかなた、こいつが謎に包まれている。

彼のことを誰に訊いても、核心を突く答えが返ってこなくて、まともな情報が何一つ入ってこなかったという。

それにしても、女のいるチームなんて聞いたこともない。

自分から仲間に入れてくれと頼む勇気があるのは認めよう。

ただこの張り場争い、女にはちよつときついで。

ガラガラつと店の引き戸を開ける音

「ただいまー。」

「青空決死隊」のリーダーとの打ち合わせをしに行っていたタケが戻ってきた。

「どうだったんだよ。」

ニシが待ちきれずに訊ねる。

「勝負は明後日。時間は午前八時。あいつらがここに来る。

内容は三種類、俺たちが全部決めていいらしい。

勝てば張り場が増えて、負ければなくなる。」

言い終えて、タケが心配そうにこちらを見てきた。

「ヤス、この勝負、受けてよかったと思うか？」

俺は少し考えてから答えた。

「よかったんじゃないの。ちょうど暇してたところだし。それに・・・」

言葉を切る。

そう、いくら敵が強くてもいいじゃないか。負けたっていいじゃないか。

ここでいつまでもくすぶっているよりは。

「聞いてくれ、いい考えがある」

勝負はもうすぐだ。

弱気になってどうする。

ゴールデンビートルズは絶対不滅だろ？

戦闘開始

晴れ上がった空に入道雲、

じりじりした暑さと時折吹きすぎる生暖かい風。

「これより、ゴールデンビートルズ対青空決死隊のバトルを始める。」

「一種目め、ポルデリート！」

「いざ、神妙に勝負！」

夏真つ盛りの今日、過去最大の張り場争いはとうとう幕を開けた。

張り場争いで最もよく行われる種目の一つとされ、

時には運によつて勝敗が大きく左右することもある、

市販のカードを使って繰り広げられる壮大な頭脳戦。

つまりトランプの神経衰弱の応用。

それが、ポルデリート。

この勝負が、ほとんど俺の腕にかかっていると言っても過言ではない。

責任は大きい。

全員で円になり囲っているのは、バラバラに散らばったたくさんのカード。

その数、200枚。

この中からたった一組ずつしかない

同じ絵柄のカードを探し当てなければならない。

「じゃん、けん、ぽんっ！」

いにしえより伝わる公平な儀式によつて順番はこうなった。

ユズ タケ じんぐうじいぶき ニシ きさらぎかなた いばらす
すき ツル 俺。

どうやら運はこちらに味方しているようだ。

一番手のユズは頭の働きは鈍いが、天性の強運の持ち主。滅多に当たることのない一番手にうってつけの配役。

そのあとに青空決死隊の三人が続かなかったのが残念だが、まあいいだろう。

あとは座り方だ。

このゲームの原則として、全員がカードを引く順番で円になって正座、

というものがある。

ここでも運はあった。

この場で唯一の女子であるいばらすすきのとなりに座るのはチーム自慢の美男子、ツル。

男の俺から見てもアイツのルックスはルール違反だ。

いばらすすきがなびかないはずがない。

もしかすると集中力が切れて思わぬミスをしてくれるか、

はたまたこれから先の情報提供者に寝返る可能性もないでもない。

そして極めつけは、この俺がラストに回ってきたところか。

ユズの強運でカードを稼ぎ、俺の記憶力で、取れるカードを全てかつさう。

ツルの存在も大きい。

この勝負、勝ったな。

ゲームはユズの2連続先取から始まった。

いつものことながら感心する。

200枚のカードの中から何の情報もないまま

勘だけを頼りに二組も当ててしまうのだから。

それからは何の進展もないまま一巡目が終わった。

さすがにこの少ない情報の中でカードを当てることはできない。

俺の出る幕はまだないようだ。

二巡目、三巡目と、どんどんカードはめくられていったが、ユズが二回に一回くらいの確率で当てる以外には誰もカードを取ることはできなかった。

そして、ゲームは五巡目にさしかかり動きを見せた。

ユズが外したカードをタケがフォローしたのだ。

タケ、ナイス！

俺は心の中でガッツポーズ。

しかし、じんぐうじいぶき、いばらすすきも一組ずつ取って追い上げてきた。

カードもけつこうめくられてきている。

そろそろだな。

記憶を探る。

五巡目のラスト、俺の番がやってきた。

大丈夫、いける。

今までのカードの出現状況を片っ端から思い出し、取れるカードを全てめくっていった。

収穫は、八組。

これで青空決死隊と大きく差をつけた。

よし、いいぞ。

みんなから称賛と驚嘆のまなざしを浴びつつ、俺はほくそ笑んだ。しかし次の六巡目で、俺は自分の甘さに気づかされることになる。

ニシが外したことから始まった六巡目は、

誰もカードを取ることなく進んでいった。

そして、三番手である青空決死隊リーダーのじんぐうじいぶきの番。

そこで、事件は起こった。

自分の足下にあったカードを引き、

直前にタケが引いたカードと合わせるじんぐうじいぶき。

俺もそこまでならマグレだと思ったさ。

でも彼の手は止まらなかった。

さらに二組目、三組目と次々にカードを取っていく。

その数、五組。

それは、俺の頭がインプットしている現段階で取れるカードの最大枚数だった。

冷たい汗が頬を伝う。

まさか、アイツも今まで出たカードを全て記憶しているというのか？その通りだった。

何回順番が回ってきても、じんぐうじいぶきは取れるカードの最大枚数を持って行く。

それにもない、俺が取るカードも少なくなる。

もはや、この勝負は俺の一人勝ちにはならなくなってしまったようだ。

カードも残すところあと96枚。

ゲームは中盤を迎えていた。

ポルデリートはここからが速い。

俺がいつぺんに大量のカードを取っていくからだ。いつもなら。

ただ、今日は違う。

頭の切れるやつがもう一人いるせいで、カードもいつもの半分ずつしか取れない。

しかし、負ける心配はしていなかった。あることに気づいてしまったからだ。

それは、カードを引く順番。

俺からじんぐうじいぶきまでの間には、ユズ、タケ

の二人。

じんぐうじいぶきから俺までの間には

ニシ、きさらぎかなた、いばらすすき、ツルの四人。

自分の前にカードをめくる人数が多い方がたくさんの情報を得られ

る。

つまり俺の方がたくさんカードを取れるのだ。
さらに、こちらには強運のユズがついている。
負けるはずなどないのだ。

10分後。

「勝利チーム、ゴールデンビートルズ」

五人の歓声があがった。

一つ残念だったのは、

いばらすすきがツルに興味を示さなかったこと、そのくらいか。

中盤戦

「二種目目、サイコネシス。」

「いざ、神妙に勝負！」

とうとう始まった二回戦。

サイコネシスは100%体力勝負のゲームだ。

つまり、俺が役に立つことはほとんどない。

むしろ足手まといになるだろう。

いないほうがいい存在へと成り下がった俺は、

戦場の端っこでおとなしく目立たないよう頑張っていた。

「3、2、1、GO！」

お、どうやら始まったようだ。

みんなが一斉に広場全体へと広がっていく。

たった今から、ここはすさまじい戦いが繰り広げられる戦場となる。

このゲームの説明を少ししておこう。

サイコネシスはポルデリートと同じ三大ゲームの中のひとつで

まず体力、次に判断力、そして精神力が重要になってくる過酷なゲームだ。

まず、戦場となる広場をきれいに半分ずつに分け、そのどちらかをチームの陣地にする。

もう1つは敵の陣地だ。

そして、自分達の陣地にドッジボールを1つ置く。

それから、全員が口に赤い布をくわえる。

これで準備は終わりだ。

両チームの準備が終わったら、カウントダウンでゲームはスタートする。

そうしたら、あとは敵の陣地のボールを奪いに行くだけだ。
しかし、敵陣に乗り込んだ際、くわえている赤い布を取られてはいけない。

その時点で自分の攻撃は終わってしまい、陣地に戻らなくてはならないのだ。

そして、同様に敵もボールを奪いにやってくるから
こちらは攻めてきたヤツのくわえる布を取ればいい。

そうして取った布は全て自分たちの物になり、
攻撃に失敗したら、代わりにその布を使ってもう一度チャレンジできるのだ。

ボールを奪って、布を取られることなく陣地に帰ってこられたらそのチームの勝利となる。

先ほどのポルデリートでは俺たちが勝利した。
ここで勝てば3試合目をする前に勝負はつく。

ただいまゲーム開始三十秒後。

両チームにらみ合いが続いている。

ゴールデンビートルズはいつこうに動くそぶりを見せないが、これは正解だ。

ここで出て行っても何も収穫はないだろう。

こっちが優勢なうちは慎重に行った方がいい。

そうなると気になるのは相手チームだ。

さて、どんな出方をするのやら。

試合開始一分後。

青空決死隊が動いた。

さきがけは、いばらすすき。

しかし、すぐにタケに布を取られてしまった。

やはりここは様子見できたか。

あとの二人は動かないが、タケの素早い対応を見て出しづっている

ようだ。

よし、チャンスだ。

ここで攻めるしかない！

「ゴー！！」

タケの大声で攻撃の合図が出た。

すぐに強運のユズが走り出す。

敵の間をすりすりすると交わしていき、ボールから敵を遠ざける。

続いて俊足のニシ。

敵陣の外周をぐるぐる回って、敵を混乱させる。

それから第六感の持ち主、ツルが絶好のタイミングを見計らって

タケに合図をする。

そして、屈強なタケがボールを取って布を何度も引っ張られながらも

取られることなく見事、陣地に戻ってくる。

そして、ものの三分間でゲームは終了する。

そう、いつもなら。

「ゴー！！」

タケの合図が出た。

ユズが走り出し、いつもの強運で敵をかわす。

ニシも出た。

やはりいつものように敵陣を回る。

青空決死隊の三人はいきなりの攻撃について行けていないのだろう

防御がワンテンポ遅れている。

このままいけば、勝てる！

そう確信したときだった。

ユズの合図で飛び出したタケが一瞬で布を取られたのだ。

あのタケが！

俺は信じられない光景に我が目を疑った。

タケを破ったのは、きさらぎかなた。

ツルの情報収集に引っかからなかった謎の男だ。

何でだ。

タケが布を取られたことなんて今まで一度もなかったのに。
それを一瞬で……

一体何者なんだ、きさらぎかなた。

一気に体勢を崩したゴールデンビートルズは一目散に陣地へと戻ってきた。

みんな不安そうな顔をしているが、それもそのはず。
実を言うと俺たちの作戦らしい作戦といえば、さっきのが一つだけなのだ。

今まで、この作戦に勝てるチームはいなかった。

だから他の作戦なんてもうないし、

これから新しい作戦を立てるなんてのは不可能だ。

もう一度同じ戦法でいくことはできるが、

そんなことをしたら今度は確実に全員の布を取られるだろう。

みんなが頼みの綱である司令塔、俺にチラチラと視線を送ってくる。

どうしようか……

限られた時間の中で作戦を立て、

それを敵にはばれないようチーム全員に知らせる。

いつ攻めてくるかもわからない敵の動きにビクビクしながら

これらの動きができるだろうか。

……

……無理だな。

作戦のことに注意が向いている隙に攻められるのがオチだ。

でも、このまま何もしなくても奴らはきつと攻めてくる。

防御仕切れる自信もない。

勝てる望みはもう限りなく少なくなってきた。

無駄な体力はなるべく使いたくない。

ここで出てくる考えはただ一つ。

それは、敗北宣言。

張り場争いにおいて、最も屈辱的な行為とされてきたこの敗北宣言を俺たちもとうとう使わざるを得なくなったようだ。

そして………

「「「「「参りました」「」「」

五人の声が上がった。

ゴールデンビートルズ初めての惨敗である。

しかし、これは体力温存のための敗北。

次に繋げるための敗北なんだ。

この屈辱を無駄にんかしないぜ？

残念だったな青空決死隊。

次の勝負、負ける気がしない！！

終盤戦

「ゴールデンビートルズ、次の種目は何だ。」

「まだ聞かされていないぞ。」

「ポルデリート、サイコキネシスときたら、次はやはりネプチューンか？」

青空決死隊の三人が訊ねてきた。

俺の考えた通り、あつちは三種目を宣言した時に

俺たちがバトルの定番である三大ゲームを律儀にチョイスすると思つたらしい。

そう、俺だつて始めはそれを考えたさ。

でもこのバトルはただの張り場争いなんかじゃない。

俺たちには張り場の拡張なんかどうだっていい。

これはお互いのプライドをかけた真剣勝負なんだ。

絶対に負けるわけにはいかない。

タケが一步進み出る。

「宣言する。三種目は、宝探し。」

そう、これが俺の思いついた名案だ。

青空決死隊はまさかのチョイスに啞然としている。

そりゃそうだ、こんなに大きなバトルの最終種目に

流行つてもいないし、そもそもバトル種目であるのかさえ定かでないしよばい宝探しを選んだんだから。

「お前達、正気で言っているのか。」

「この勝負は捨てゲームにはできないことくらい知っているのだから？。」

「二言は認めないぞ。」

慌てる彼らに対して冷静なタケ。

「こっちは大まじめだ。よく聞け、ルールを説明する。これからチーム対抗宝探しを始める。

開始の合図はお昼の鐘。それが鳴ったら一斉に宝を探しにかかる。範囲はここ、ミクロムーン島全域。

もし宝を見つけたら、この通信機で敵と連絡を取りここに全員で集まり、

それが本物の宝であるかどうか敵チームが審議する。

制限時間は六時間。ちょうど夕方の方の鐘までだ。

より早く宝を見つけ出すことができた方の勝利とする。

そして肝心な宝の正体、それは……………

黄金の堅武斗虫だ。」

「……………」

……………この空気を何と表現したらいいのだろう。

青空決死隊の三人は啞然とした表情でじつと虚空を見つめ続けている。

だれもなにもリアクションをしない。

言うなれば「無」の時間。

生暖かい風が吹きすぎる。

「無」はタケの一言で壊された。

「のるか、ひくか。」

するともものすごい勢いで青空決死隊がツツコミだしたではないか。

「ふざけるな！おかしな種目を選んだと思ったら

今度は黄金のカブトムシだと！？」

「馬鹿にするにもほどがある！！」

「そんな要求をわれわれは認めない！！」

「……………」

彼らの叫びが収まる頃、ユズは言った。

「カブトムシじゃない、堅武斗虫だ！！！」

……………「無」の時間がやってきた。

「ガーン、ガゴーン、ゴーン、ガゴーン」
両チーム一斉にスタート。

やはり速いのはニシだ。

誰よりも速く走り出し、「おーい、速くしろよ」と仲間を急かす。それになんの意味があるのか俺には全く理解できない。が、彼が動いていないと気がすまない程

このゲームを待ちわびていたことは明白だ。

「ヤス、さっきは助かったぜ。

あんなふうに説明されたら、

黄金の堅武斗虫っているんだって思っちゃうよ。

あのままだったら宝探し、できなくなるところだった。

青空決死隊を納得させるなんて、やっぱりお前はすごいヤツだ。」

ツルが走りながら笑いかけてくる。

コイツがすると何でも絵になるな」

などと関係のないことを考えながら俺が答える。

「あのくらいなんてことないさ。俺はこの宝探しにかけてるんだ。

奴らとの力の差はほぼ互角。

ここで大事になってくるのはゲームに対するやる気だ。

この種目以外にやる気で差をつけられるものは、ない。」

ツルに対抗して、親指を立てハードボイルドに笑顔をキメる。

「そうか、そうだよな。みんなが本気で頑張れる種目じゃないとな。」

「ヤツはウイंकなんてしてきた。

・・・負けた。

わけのわからない敗北感を味わいながら宝探しは始まった。

「リーダー、ゴールデンビートルズが何を考えているのか、わかりますか？」

「ああ、見当はついている。」

「さすがリーダー、すごいです。」

「あとはちょっと細工をするだけだ。二人とも、準備はいいな？」

「はい!!!」

二人が走っていったあと、リーダーはつぶやいた、

「安川涼か、見込みはまちがいないな……」

意味ありげな笑みを残して。

決戦

宝探しが始まってから三十分ほどが経過した。

「司令塔としてのヤスに聞く。これからどうするんだ？」
タケが訊ねてくる。

しかし、そんなこと今聞かれたって俺が知るわけもないのだ。

そもそもこのゲームにゴールがあるのかさえ、わからないんだから。
「さあな。いくらなんでも、いるのかどうかもわかんない虫の居所なんて

俺が知るわけないし、ここはとりあえず手当たり次第に探すしかないんじゃない？」

そうして、森から街路樹までを探し尽くすのに、二時間を消費してしまった。

残すは、あと四時間。

「おいー、どうするんだよ。ぜんぜんみつからないー。」
とうとうユズが音を上げた。

もともとあきつばい性格なのだからしかたないが、
さすがにここまで探してもみつからないんだから
もう今までの探し方はあきらめよう。

残すはあの場所だけ。

「みんな、覚悟はあるか。」

俺は真剣に訊ねた。

きつと、ただならぬ空気を察したのだろう、
ぐぐぐだしていたみんなの表情が一斉に引き締まる。
そして全員うなずいた。

それを見て、俺は思った。

大丈夫だ、いける。

ゆつくりとかみしめるように言う。

「轟林に、行こう。」

みんなは驚かなかった。

黄金の堅武斗虫などという得体の知れないものがある場所なんて

あそこしかない。

みんなはじめから、わかっていたのだ。

轟林

ミクロムーン島の約五分の一を占めると言われているその森は

異常に成長した木々達が密生する、今の科学ではどうにも説明できない場所。

不思議な力に守られた森と呼ばれ、人々に畏れられる場所。

そこに足を踏み入れることは、未知の領域に放り出されることを意味する。

そこに、行く。

「おっ、動きましたよ。リーダー。」

ひとりが振り向きざまに言った。

「どうやら轟林に行くみたいです。」

双眼鏡を持ったひとりも振り向いた。

そして、ひとりには楽しげに唇の端を上げるのだった。

「へー、やるじゃん。おもしろくなってきた。」

おかしな鳴き声があったところから聞こえてくる。

木々が葉をざわめかせ、足下はぬかるむ。

初めて訪れたこの森は想像以上に歩きにくい。

「よし、ここからは二組に分かれて探す。

いいな、恨みつこ無しのくじ引きで決めるぞ。

ツル、あれ、持ってるか。」

どこからともなく割り箸を取り出すツル。

「えっ、何で持ってたんの？いつ用意したそれ。」

ニシの疑問は、「だって、使いそうな気がしたから。」
というツルの笑顔で切り捨てられる。

「この五本の割り箸のうち二本に爪であとをつける。」

言いながら俺はみんなの前でやって見せた。

ほら、ズルとかあったと思われたくないし。

「じゃあみんな一本ずつ持って。」

せーの、で俺が引いたのは、さっき自分で作ったあとつき割り箸だった。

さつと他の四人の割り箸を確認。

あとつき、あとつき、あとつき……

そのとき、声があがった。

「あつ、これあとつきだー！」

………なんで、こいつなんだ。

俺は楽しげにスキップしながら歩いているユズを見て溜息をついた。

「おい、危ないからあんまり跳んだりはねたりすんな。」

転んでもしらねーからな。」

言った直後に派手につまずくユズ。

更に大きな溜息が出てくる。

「おい、だーいじょーぶー？」

立ち上がったユズのひざは、見ているだけでこっちまで痛くなってくるほどすりむけていた。

「いってー………」

「だから言っただろ。もうちょっと大人しく歩け。
見てるこっちが痛くなる。」

「でも、大丈夫だよ。こんくらいのが、三日に一度はできるし。」

………恐るべし、自然治癒力。

そしてユズはまたスキップを始めた。

まったく、今日はツいてない。

くじ引きで二人組の方になってしまったのがそもそも運の尽き。
しかも、もう一人がよりにもよってユズ。
いや、ユズが嫌いな訳じゃないんだ。

その運の良さもありがたい。

ただ、こいつと二人だけでなんかをするっていうのは……..
なんていうか、一人でするより五倍キツイ。

ポルデリートみたいに単純なことを繰り返すんだったらいいんだ。
でもこれは未知の森で未知の生物を見つけなければならない。
複雑なこと山のごとし。

運の良さだけでは、その天然キャラをカバーしきれないのだ。
あああ、どうすればいいんだ。

「ヤス、大丈夫かな。」

ニシが誰にともなく言った。

だって、あのユズを連れてこの森を探すなんてのは至難の業。
さすがのヤスでも途中でいやになるに決まってる。

「さあ、どうだろうな。」

でも、くじ引きの言い出しっぺはあいつだし、どうなってもそれは
あいつの責任だ。」

「なんだよタケ、冷たいじゃん。」

いつものタケらしくない発言につっこんだのはツルだ。

「いや、そんなことない。俺はただあいつのことを信頼してるだけ
だ。」

「そんなこと言って、ホントは自分があっちのグループじゃなかつ
たことに安心してるくせに。」

「なんだと？」

「大丈夫だよ。あいつならなんとかしてみせるさ。」

険悪になりつつある空気を和やかに閉じさせるのはニシの役目。

そして、誰もしゃべらなくなった。

ただ黙々と前に進む。

おいしいげる植物をかわしながら。

時々きこえる奇妙な鳴き声におびえながら。

時にはつまずいたり、滑ったりもした。

『ここには得体の知れないモノがいる。』

はつきりとはわからないが、人間が入ってきていい場所などではないことに

そろそろ三人は気づき始めた。

沈黙の中、不安は大きくなる一方だった。

「リーダー、なんか重っ苦しい空気になってきましたよ。あの三人

」

双眼鏡を持った一人が言った。

「そろそろなにかしましょうよ。見てるだけじゃ退屈だし。」

ちやつかりおやつを食べ始めた一人が言った。

「いや、お前なに一人で食ってんの、ちよつとくれよ、いや、やっぱいいやめとく。

・・・では、いこうか」

「「らじゃー!!」」

三人は草陰から飛び出した。

最終決戦（前書き）

最終話です。

最終決戦

「午後4時50分 草陰」

「A地区、準備完了。」

「B地区、準備完了。」

「よし、あとは待つだけだ。」

「午後4時52分 沼池」

さつきから無言の時間がどれだけ続いただろうか。

もうそろそろ、みんな限界のはずだ。

いや、俺は限界だ。

ツルとタケは相変わらず険悪だし、何だか霧まで出てきたみたいだ。
5メートル先が全く見えない。

おい、この空気、どうにかしてくれよ……

絶望しかかったその時、先頭を歩いていたタケの声があがった。

「うわっ、なんだこれっ!!」

次の瞬間、踏み出した俺の右足が何かドロツとしたものに包まれた。
横でツルもギョツとしている。

ドロドロはどんどん右足を引きずり込もうとする。

俺は慌てて、まだ固い地面についているはずの左足を踏ん張った。

徐々に足が引き上げられ、最後に「ずぼっ」という音がして

やっと俺の右足は助かった。

どうやらここは沼池らしく、その端っこにあしをつっこんだのだ。
まさに危機一髪、ドロドロの餌食にならずにすんだらしい。

しかし、ツルはそうではなかったようだ。

「わっ! しっ、しずむ、しずむっ! たすけてくれっ!!」

そう言いながらドロドロに下半身を持って行かれたツルは

ばたん、ばたん腕を沼池の水面に打ち付けるが体は沈んでいく――

方だ。

ああ、やっぱりここは運動神経の差だな。

「おい、ニシ、なにボーっとしてんだ。引っ張れ！」

俺は、とつくにはい上がっているタケと一緒に、暴れるツルを引っ張った。

30秒後。

「わー、助かった……ありがとな、二人とも。」

「ったく、もつと鍛えとけよ。」

笑ったツルの背中をタケがたたいた。

おお、さっきまでの険悪なムードが消えていく。

ハブニングに感謝だ。

（午後5時15分 神樹）

「いつてー……」

ユズが転んだのはこれで5回目だ。

「気をつけるよー」

いちいち大丈夫か、なんて聞くのも馬鹿らしくなってくる。

その足には青いあざができ、赤い血が流れ、いたるところに傷ができていて、

これで本当に歩けるのかって思うけど、当の本人は意外とけろっとしているのだ。

「まあ、これでケガ1週間分かな。」

なんて言っていた。

恐るべし生命力。

「いつてー……」

おっ、6回目。

ユズがまた転んだ。

どうやらなにかにつまずいたようだ。

見ると、そこにはでこぼこした茶色い電柱があった。

これは……根っこ？

いや、そんなはずはない。

こんなに太い根っこがあつてたまるか。

でも、それはどう見ても樹の根っこだったし、なによりここは轟林なのだ。

と、いうことは……

俺はおそろおそろ顔を上げていく。

そして見た。

神樹。それは神が宿る樹。

この森の中でもひとときわ大きいその樹は、人々からそう呼ばれていた。

その根は大地を支配し、その幹は生命を生み出す。

その枝は空を支え、その葉は全てを包み込む。

俺は絶句した。

まさか本当にあつたなんて……

「ねえ、ヤス、これって、しんじゅ？」

ユズが立ち上がって上を向いた。

「ああ、そうだ。」

「初めて見たよ。」

「ああ、俺も。」

「………大きいね。」

「………大きい。」

俺たちはしばらく、そのまま動けなかった。

午後5時05分 沼池

そいつはいきなり現れた。

俺たちがツルの救出に疲れて寝ころんだ時だった。

「ブワッシャーンッ」

もの凄いしぶきの音を立てながら、そいつは沼池から上陸してきた。思いがけない出来事だったからか、

俺たちは動くことも声を出すこともできなかった。

怪獣が、そこにいた。

魚に足がついた鯨サイズの生き物なんてこの世界にいると思うか？

答えは、いない。

5秒間考えた俺たちは三人同時に逃げ出した。

あれは何なのか、他の2人は大丈夫か、そんなことは頭になかった。ただ、逃げる。

それだけを考えて走った。

俺の俊足とタケの強足を止めたのは、けたたましい鳴き声と、ツルの叫び声だった。

はっとして振り返る。

濃い霧の向こうに大きな影がぼんやり見えた。

近ずいてくるすさまじい足音。止まらないツルの叫び声。今度も迷わなかった。

一目散に影に向かって走り出す。

気づけば、叫び声はすぐそこにあった。

目の前に、腰を抜かしたツルが座り込んでいる。

「ツル！逃げるぞ！」

そう言つてツルを立ち上がらせたのはタケだった。

いつの間に来たのか、いや最初から一緒に逃げていたのか。

「おい、ニシ！手伝え！」

肩を貸そうとしたが引つ込めた。

地響きと共に近づいてきていた影が、もうぼんやりとはしていなかったからだ。

来た。

このまま逃げても追いつかれる。

「先に逃げてる！」

俺はそう言い残して、得体の知れない怪物の前に立ちふさがった。怪物が足を止める。

体は魚、足は鳥、鱗がぎらついて、目は光っている。

改めて見るとんでもない生き物だ。

研究でもしたら軽く有名人にはなれそうだな。

どうでもいいことを考えたが、恐怖がまぎれるわけでもなかった。しょうがない、ここは気合いだ。

「おい、トリザカナ、かかってこいよ！」

叫んで怪物をにらみつける。

「ギューエーッズズズッ」

返事のつもりか鳴き声を発した怪物が、大股でこっちに向かってきた。

危うく踏みつぶされそうになるが避ける。

「わっ！あぶねー！」

安心するまもなくまた襲いかかってくる。

「ガガガッ、ギューアッ」

今度は余裕で避けられた。

そして、俺は気づいた。

コイツ、頭は悪いみたいだ。

さっきから攻撃といえば俺に向かってつつこんでくるだけだし、

第一、魚と鳥っていう組み合わせからして、

賢い生き物ができあがるとは考えにくい。

よし、うまくすればハメられる。

「ギューエーッ」

走り出した怪物は、まっすぐ俺の方に向かってくる。

今だ！

俺は体を180度回して、

真後ろ10メートル先にあるはずの沼池に向かってダッシュした。

地響きが追いかけてくる。

頼む。間に合ってくれ……………

足音がすぐそこに迫ったとき、霧がかすむ視界に地面と沼池の境界線が入った。

さっと横に転がり込む。直後ズシン。

さっきまで俺の体があったところに怪物の足がめりこんだ。
そして、勢いを殺しきれない怪物は、そのまま沼池につっこんでいった。

「ギャオエーッ、ギョーッ、ギューエーッ」

断末魔のようなすさまじい鳴き声を残して、

魚のような鳥のような怪物は沼池へと沈んでいった。

「へっ、楽勝ーっ。」

そのまま目の前が暗くなった。

「午後5時25分 神樹」

「ねえねえ、ヤス、そろそろ行こうよ。時間、なくなっちゃうよ。」

ユズがそう言いだしたのは、あんまり神樹を見上げすぎて二人とも首が痛くなり始めた頃だった。

時計を確認して俺は絶句した。

午後5時25分。

もうゲーム終了まで35分しかない。

「ユズ、まずいぞ。あと35分でゲームが終わる。」

焦ってきた俺とは対照的に、ユズは落ち着いていた。

「あと35分以内に見つけなければいいんですよ。」

そう言って、先に歩き出す。

この時、俺はユズが意外にも強いやつであることをはっきりと感じた。

そうか、ユズって、本当はこんなやつだったのか。

その足のケガにも負けないし、すごいな。

背中が光って見えるよ。

転んで泥だらけの背中が、俺の目にはなぜかピカピカ光って見えた。

「……………いや。」

そんなはずはない。

いくらなんでもそれはない。

背中が光って見えるって何だ。

俺の頭はどうかしてるのか。

そんな一カ所だけ光ってるなんてあるわけないだろ。
きつとあれだ、コガネムシか何かだ。

うん、そうに違いない。

あれ、でもこのコガネムシ、やたらデカくないか？

あつ、そうか、轟林サイズってやつだ。

・・・・・・って、

「あああーーーーーっっ！」

俺は思わず大声なんか出してしまった。

「うわっ、びっくりしたー。どうしたんだよ、ヤスー。」

「おい、ユズ、動くなよ。微動だにするな。息を殺せ。石になれ。」

「なんだよ、わけわかんないこと言うなって。」

「いいから、動くな。」

そろり、そろりとユズの背中に近づく。

ゆっくりと手を伸ばし、親指と人差し指の間に照準を合わせ、
いけっ！

手に掴んだ堅い感触はやっぱりそうだった。

飛び出たツノ、金に輝くその体。

「ヤス、もう動いてもいいー？」

振り返ったユズが俺の手を見て目を見張った。

「ヤス、それ、もしかして・・・。」

「やったなユズ、俺たちの勝ちだ。」

午後5時32分 沼池

「・・・おい、ニシ。だいいじょうぶか。」

タケの声で目が覚めた。

え？ 俺、氣い失ってたの？

「お、目、覚めたな。」

そばにタケとツルがいた。

俺を心配して、ここまで戻ってきてくれたようだ。

「ニシ、ありがとな。助かったよ。
でも、あんなわけわかんないやつ、よく倒したな。」
ツルは腰も治ったみたいだ。

「倒したんじゃないよ。勝手に逃げてったんだ。」

「ははっ、いくら怪物だつてニシの足には勝てないぜ。」

タケが笑ったとき、三人分の通信機が一斉に鳴り出した。
和やかな空気が一瞬にして張り詰める。

代表してタケが取った。

「こちらゴールドンビートルズ、竹本勇大。おお、ヤス、どうした。
………っええ?! 本当か!

………ああ、わかった。じゃあ、またな。」

タケが電源を切った途端、ユズが食いついた。

「なんだって? なんて言ってた?」

タケが重々しく口を開いた。

「喜べ、二人とも。」

そして二カつと笑った。

「俺たちの勝ちだ!」

午後5時35分 広場

三人の通信機が一斉に鳴り出した。

反射的に全員が取り、一人が答える。

「こちら青空決死隊、神宮司息吹。」

「こちらゴールドンビートルズ、竹本勇大。」

直ちに広場に集合。確認審査を行う。

「まさか、見つけたとも言うのか。」

「それを今から審査すんだよ。」

通話は一方的に断ち切られた。

午後5時50分 出口

「うわーっ、やーっと抜け出せた!。」

俺とユズが轟林を抜け出してからちょうど5分後に、

ニシの声と共にタケとツルが、多い茂る木々の向こうから現れた。

「えっ、もう出てきてたのかよ。俺たちの方が速いと思ってたのに。」

タケが本当に残念そうに言った。

「こっちはヘンゼルとグレーテルやったから。」

ユズのこのセリフは、俺が道に

割り箸のかけらを落としながら歩いたことを意味する。

「こっちにはツルの第六感があったのにな。」

ニシが言うからには、ここまでツルの勘だけに頼って来たのだろう。まったく、恐ろしいヤツだ。

「それよりさ、アレ、見せてくれよ。」

ツルが急かすように言った。

俺がずつと手に掴んでいたものをみんなに見せる。

「おおっ!」

「これ、ユズの背中についてたんだろ？」

やっぱりユズの運の良さには助けられっぱなしだな。」

「ま、俺たちが勝つとは思ってたけどな」

「ピカピカしてるよ。」

タケも、ツルも、ニシも、ユズも、俺もみんな目を輝かせていた。

そう言えば、俺たち、昔はこんな目をしていた。

いつの間に、輝かなくなっただろう。

でも、そんなことはもうどうでもいい。

今、輝いているんだから、それでいいじゃないか。

「おい、みんな、6時まであと5分もないぜ。」

遅れて到着なんてかつこ悪いだろ、走れっ!」

タケの声で一斉に走り出した俺たちの足は、一直線に広場へと向かっていった。

最終決戦（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

この後続編に続くので、よかったらそつちも読んでみてください。

タイトルは「続黄金の堅武斗虫　く水面下の駆け引き」です。

謎がいろいろと解けていく感じになってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0881n/>

黄金の堅武斗虫 ～ミクロムーン島に眠る秘宝～

2010年10月17日04時42分発行